

きて、みて、あじわう四日市市の近代化
市指定文化財 旧四郷村役場の見所
柳澤宏江

大正9年10月着手、大正10年6月落成
寄付者 伊藤傳七 伊藤傳平
設計技師 大石清隆
現場技手 中野康太郎
工匠 小崎庄兵衛、小崎金治郎
(設計に野田新作関与か 部材表用紙の印字による)

伊藤伝七らが在来産業を基盤に近代商工業を興し、定着させた大正時代、四郷村に誕生した村役場は、近代産業発祥の地を意図した形態が選択されました。前衛的で合理的、先駆的デザインである村役場は、機能面と意匠面のバランスの良さに特徴があり、同時代の建物との共通性も見受けられます。2021年で創建百年を迎えるに際し、旧四郷村付近の集落のシンボルとして親しまれてきたこの建物を未来に残し、展示、教育施設等として活用することによって、手工業的在来産業から近代産業への変革のあり様をはじめ、その歴史的・社会的背景、当時の人々の活力を伝承する試みが行われています。

＜役場建築の実情と四郷村役場＞

我が国にみる同時代の町村役場が、前近代の和風と称される形式であったのに対して、端正な洋風建築が建てられた背景には、建築教育を受けた技術者が東洋紡績に常駐し、既に洋風の工場や事務所を手掛け、経験を経ていることがある。四郷村にて生み出された先駆的な近代産業が、四日市市の地に着実に根付いたように、洋風意匠もまた、技術者の手によって根付いていった。

＜塔のある庁舎＞

塔は、幕末以降、銀行やホテル、学校、役場等の洋風建築の屋根に聳え、文明開化の代名詞のように新しい建物に用いられた。一方、建物に付属する塔は、眺望と地域のシンボルを機能とするものであり、西欧のシティセンターを起源とする。日本では昭和13年に竣工した川崎市市役所（RC造 村野藤吾）のように、戦前まで用いられていた。竣工当初、塔の屋根はスレート葺に曲線を描いて、特徴ある意匠的に仕上げられていた。



＜特徴的な外観の構成＞

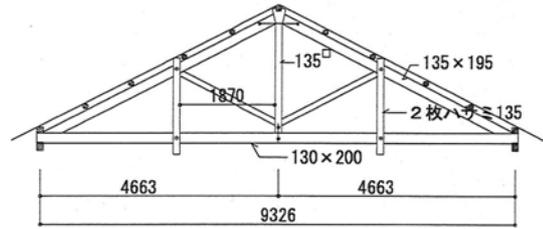
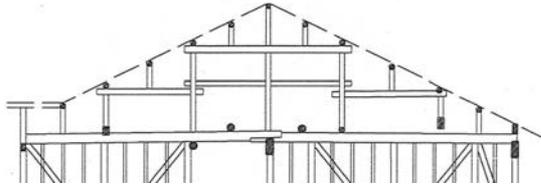
外壁の仕上げを3層、付柱や付梁にて壁面をリズムカルに分節し、吹寄せた上下窓を等間隔に配置する事例は、建築家や中堅の建築技術者が手掛けた学校や病院に見受けられる。



事例：奈良女子高等師範学校本館(明治41年)

＜合理的な平面構成と構造＞

四郷村役場は、左右非対称である。村長室や貴賓室など、小規模な部屋を十字型に配して廊下にて仕切る主屋、カウンターを構える役場事務室と、村議会を行う会議室からなる主屋袖、そして塔が接続して一つの建物となっている。これらはそれぞれ異なる構造によって屋根が架けられている。少人数に対応する主屋は、和小屋、大人数が集う無柱空間の主屋袖には、洋小屋を用いる。簡潔な平面と規模に適した構造の選択は、合理的である。また設計寸法には、尺貫法を用いており、先進的なデザインを実現可能な技術に落とし込む、設計者の力量がみてとれる。



<和小屋と洋小屋>

和小屋の梁間は、梁が水平荷重をうけるため、保持できる梁間が7～8mで限界となるが、洋小屋は、三角形を組み合わせ、合掌によって梁を持ち上げているので、梁間を広くできる特徴がある。



<開放的な階段>

階段は、村の議員や村長といった限られた人物のアプローチとして用いられた。部材の質が高く、目の細かい広葉樹を段板や手摺りに用いニスの仕上げが確認できる。縁取りにアクセントのあるリノリウムを敷き、装飾的な階段を演出している。輸入物あるいは国産の最初期のものとみられる。踊り場にある大きなガラス窓にも注目して欲しい。



<擬石塗の円柱 1階事務室>

中央にある円柱は、前衛的な柱頭装飾を施した漆喰塗である。基部には、墨と朱墨の濃淡によるマール模様を描かれた希少な左官表現がみられる。これは擬石塗りという技法で、塗装表現に多くみられるが（例えば、旧名古屋控訴院地方裁判所区裁判所庁舎（大正11年）玄関ホール）、左官仕事による事例が現存するのは珍しい。



<カウンター越しの接客>

1階事務室にみるカウンターは、創建時にはL字型であった痕跡が残っていた。村民は、塔一階にある入口から事務室へ入り、土足のままカウンター越しに接客を受ける。この接客形式は、明治時代以降に銀行建築にもみられる近代的な公共所の接客形式である。



<復原された車寄せ>

主屋中央にある車寄せは、平成6年、伊藤三千雄先生(元名城大学名誉教授)の指導によって古写真を基に復原された。議員や村長の入口として相応しくデザインが凝っている。3本に吹き寄せた柱、持送り、笠木をうねらせた手摺りに特徴があり、上部の妻壁と相まって、格の高い意匠を構成している。車寄せから玄関ホール、階段室をみる眺めは、この建物の見所である。